京都大学文学研究科　グローバル COE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

**アジア版エラスムス次世代研究者派遣・報告書**

<table>
<tr><td rowspan="2">（フリガナ）<br>氏　　名</td><td>リ　ホンジャン<br>李　洪章</td><td>所属（研究科、学年/職名）<br>文学研究科　D3</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="5">派遣先大学・<br>研究機関、<br>研究科・研究所</td></tr>
<tr><td colspan="2">大学・研究機関・研究科名<br>ソウル大学校比較文化研究所</td></tr>
<tr><td colspan="2">派遣先都市・国名<br>大韓民国・ソウル特別市</td></tr>
<tr><td colspan="2">派遣期間　2010 年　4 月　19 日　　～2010 年　8 月　31 日</td></tr>
<tr><td colspan="2">派遣先指導教員または受入研究者（複数可、主指導教員には*）<br>KWEON Sug-In</td></tr>
<tr><td>研究テーマ<br>（日・英）</td><td colspan="2">トランスナショナル・コリアンの「異種混交性の戦略」に関する比較社会学的研究<br>A Comparative Sociological Study on the Strategy of Hybrid Identity among the Transnational Koreans</td></tr>
<tr><td colspan="3">主要受講科目名（５つまで）および担当教員名</td></tr>
</table>

- 研究機関、テーマ、受講科目などの表記は日本語と英語の両方でお願いいたします。
- エラスムス派遣の研究上の成果について 2000 字程度で報告してください。(別紙使用。参考資料がある場合、添付してください。)
- 派遣留学・調査/研究中の様子がわかる写真のファイルがあれば（肖像権に触れない 3000KB 以下）添付してご提出ください。本プログラム・ホームページのエラスムス事業のページに掲載いたします。

＊帰国後一ヶ月以内に GCOE 事務局宛 intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp にメールでお送りください。

## エラスムス派遣の研究上の成果

京都大学文学研究科　グローバル COE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

**アジア版エラスムス次世代研究者派遣・報告書**

## １．　研究・調査実施状況

海外派遣期間中に、在日朝鮮人と中国朝鮮族をグローバル化の進展する世界における「トランスナショナル・コリアン」の一つの現象形として位置づけ、「トランスナショナル・コリアン・アイデンティティ」の重層的な位相を解明することを目的として、在日朝鮮人および在韓中国朝鮮族へのライフストーリーインタビューを行うことを計画していたが、それらの計画はおおむね達成されたと考えている。以下に、期間中の調査研究実施状況について、２点に分けて具体的に述べる。

### 日本と韓国を往来する在日朝鮮人のアイデンティティ

研究計画通り、在日朝鮮人留学生へのインタビュー調査を実施し、彼/彼女らが、本国との接触をはたし、「故国」である韓国社会で生を営むなかで、「祖国/民族」観を変容させながらどのような生活戦略をとっているのかについて考察した。インタビューは計６名に各２回ずつ行った。一回目はライフ・ストーリーを中心に聞き取り、二回目は日本と韓国、朝鮮民主主義人民共和国に対する国家観や、自身が在日朝鮮人であることについてどのように考えているのかなど、彼/彼女らのナショナル/エスニック・アイデンティティのあり方に関して聞き取った。なお、すべてのインタビューは、半構造化面接の形で行った。

インフォーマント６名の渡韓目的は、①朝鮮学校を卒業したあと、韓国語の習得を主たる目的として渡韓した者と、②日本社会において在日朝鮮人として生きることに苦痛をおぼえ、それから逃れるために渡韓した者の二つにおおきく分けられる。

①前者の場合、渡韓の目的が、従来日本社会で生を営むうえで足枷となる可能性の高い「在日」という立場を、言語の習得などを通して「活用」しようとするポジティブな戦略に基づいている。しかし、彼/彼女らは総じて、韓国においても「在日」はマージナルな存在であるという認識を有していた。このことは、たとえ、生活戦略上「在日」であることを活用することができたとしても、居住国―故国間の移動の経験そのものは、ディアスポリックな感情を強めるように作用する可能性があることを示唆している。

②後者の認識は、在日朝鮮人と日本人のあいだに生まれたいわゆる「ダブル」の女性２名の語りにみられた。両者は、渡韓することで日本での「苦痛」は緩和されたと語った。彼女らは、日本での間接的（伝聞的）被差別体験を協調して語っていたが、それはおそらく、「ダブル」ではなく「在日朝鮮人」としてアイデンティファイするための手段でもある。したがって、彼女らにとっての「渡韓」は、差別の苦痛からの逃避であると同時に、コリアンに「なる」ためのプロセスでもあるのだろう。しかし、そもそも在日朝鮮人という存在自体が韓国において「パンチョッパリ（半日本人）」と呼ばれ周縁化される存在であるがゆえに、「ダブル」は再び自らの「ダブル」性を自覚させられてしまうのである。

今後は、6 名のインフォーマントにさらなる聞き取りを行い、①と②の二つの論点に分けて、論文を執筆する予定である。

**在韓中国朝鮮族留学生の生活と意識**

在韓中国朝鮮族については、当初の計画を若干変更し、こちらも留学生を取り扱う調査を行った。「在韓朝鮮族留学生ネットワーク（ＫＣＮ）」という団体に参加し、そのメンバー２名にインタビューを行った。

中国朝鮮族にとって、韓国への留学は、民族教育によってすでに朝鮮語を習得しているため、当然のことながら新たな言語の習得を目的としているわけではなく、多くの場合、中国語を話せる有力な人材として韓国の大手企業への就職を目指すための留学であるようだ。また、2009 年に至るまで、中国朝鮮族学生は、漢族学生とほぼ変わりのない滞在資格しか得られなかったのに対し、現在は在外同胞査証を取得可能となり、滞留資格の区分にともなう活動の制限をほとんど受けずにすむようになった。

インフォーマント２名の語りからは、「エスニシティの戦略的利用」ともいうべき志向性がみられた。1990 年代の朝鮮族社会においてみられた「故国」に対する受身の期待感はすでに整理され、「在外同胞」であることを利用し、韓国での経済的成功を目指しているように思われた。こうした能動的な志向性は、あくまでも自分たちは「中国の」朝鮮族であるという、安定的なナショナリティ（国民的帰属）に支えられているものであった。

なお、今回の調査では十分なデータを得ることが出来なかったので、本年度中に数度訪韓し、追加調査を行う予定である。